

ろくろ首

ROKURO-KUBI

小泉八雲

青空文庫

五百年ほど前に、九州菊池の侍臣に磯貝平太左衛門武連たけつらと云う人がいた。この人は代々武勇にすぐれた祖先からの遺伝で、生れながら弓馬の道に精しく非凡の力量をもっていた。未だ子供の時から劔道、弓術、槍術では先生よりもすぐれて、大胆で熟練な勇士の腕前を充分にあらわしていた。その後、永享年間（西暦一四二九―一四四一）の乱に武功をあらわして、ほまれを授かった事たびたびであった。しかし菊池家が滅亡に陥った時、磯貝は主家を失った。外の大名に使われる事も容易にできたのであったが、自分一身のために立身出世を求めようとは思わず、また以前の主人に心が残っていたので、彼は浮世を捨てる事にした。そして剃

髪して僧となり——回龍と名のつて——諸国行脚に出かけた。

しかし僧衣の下には、いつでも回龍の武士の魂が生きていた。

昔、危険をもともしなかつたと同じく、今はまた難苦を顧みなかつた。それで天気や季節に頓着なく、外の僧侶達のあえて行こうとしない処へ、聖い仏の道を説くために出かけた。その時代は暴戾乱雑の時代であつた。それでたとえ僧侶の身でも、一人旅は安全ではなかつた。

初めての長い旅のうちに、回龍は折があつて、甲斐の国を訪れた。ある夕方の事、その国の山間を旅しているうちに、村から数里を離れた、はなはだ淋しい処で暗くなつてしまった。そこで星

の下で夜をあかす覚悟をして、路傍の適当な草地を見つけて、そこに臥して眠りにつこうとした。彼はいつも喜んで不自由を忍んだ。それで何も得られない時には、裸の岩は彼にとつてはよい寝床になり、松の根はこの上もない枕となった。彼の肉体は鉄であった。露、雨、霜、雪になやんだ事は決してなかつた。

横になるや否や、斧と大きな薪の束を脊負うて道をたどつて来る人があつた。この木こりは横になっている回龍を見て立ち止まつて、しばらく眺めていたあとで、驚きの調子で云つた。

『こんなところで独りでねておられる方はそもそもどんな方でしょうか。……このあたりには変化へんげのものが出ます——たくさんに
出ます。あなたは魔物を恐れませんか』

回龍は快活に答えた、『わが友、わしはただの雲水じゃ。それゆえ少しも魔物を恐れない、——たとえ化け狐であれ、化け狸であれ、その外何の化けであれ。淋しい処は、かえって好む処、そんな処は黙想をするのによい。わしは大空のうちに眠る事に慣れておる、それから、わしのいのちについて心配しないように修業を積んで来た』

『こんな処に、お休みになる貴僧は、全く大胆な方に相違ない。ここは評判のよくない——はなはだよくない処です。『君子危うきに近よらず』と申します。実際こんな処でお休みになる事ははなはだ危険です。私の家はひどいあばらやですが、御願です、一緒に来て下さい。喰べるものと云つては、さし上げるようなもの

はありません。が、とにかく屋根がありますから安心してねられます』

熱心に云うので、回龍はこの男の親切な調子が気に入って、この謙遜な申出を受けた。きこりは往来から分れて、山の森の間の狭い道を案内して上って行つた。凸凹の危険な道で、——時々断崖の縁を通つたり、——時々足の踏み場処としては、滑りやすい木の根のからんだものだけであつたり、——時々尖つた大きな岩の上、または間をうねりくねつたりして行つた。しかし、ようやく回龍はある山の頂きの平らな場所へ来た。満月が頭上を照らしていた。見ると自分の前に小さな草ふき屋根の小屋があつて、中からは陽気な光がもれていた。きこりは裏口から案内したが、そ

こへは近処の流れから、竹の筧で水を取ってあつた。それから二人は足を洗つた。小屋の向うは野菜畠につづいて、竹藪と杉の森になつていた。それからその森の向うに、どこか遥かに高い処から落ちてゐる滝が微かに光つて、長い白い着物のように、月光のうち動いてゐるのが見えた。

回龍が案内者と共に小屋に入った時、四人の男女が炉にもやした小さな火で手を暖めてゐるのを見た。僧に向つて丁寧にお辞儀をして、最も恭しき態度で挨拶を云つた。回龍はこんな淋しい処に住んでゐるこんな貧しい人々が、上品な挨拶の言葉を知つてゐる事を不思議に思つた。『これはよい人々だ』彼は考えた『誰か

よく礼儀を知っている人から習ったに相違ない』それから外のものが『あるじ』と云っているその主人に向つて云つた。

『その親切な言葉や、皆さんから受けたはなはだ丁寧なもてなしから、私はあなたを初めからのきこりとは思われない。たぶん以前は身分のある方でしたろう』

きこりは微笑しながら答えた。

『はい、その通りでございます。ただ今は御覧の通りのくらしをしていきますが、昔は相当の身分でした。私の一代記は、自業自得で零落したものの一代記です。私はある大名に仕えて、重もい役を務めていました。しかし余りに酒色に耽つて、心が狂つたために悪い行をいたしました。自分の我儘から家の破滅を招いて、た

くさんの生命を亡ぼす原因をつくりました。その罰があたつて、私は長い間この土地に亡命者となつていました。今では何か私の罪ほろぼしができて、祖先の家名を再興する事のできるようにと、祈つています。しかしそう云う事もできそうにありません。ただ、真面目な懺悔をして、できるだけ不幸な人々を助けて、私の悪業の償いをしたいと思つております』

回龍はこのよい決心の告白をきいて喜んで主人に云つた、
『若い時につまらぬ事をした人が、後になつて非常に熱心に正しい行をするようになる事を、これまでわしは見ています。悪に強い人は、決心の力で、また、善にも強くなる事は御経にも書いてあります。御身は善い心の方である事は疑わない。それでどうか

よい運を御身の方へ向わせたい。今夜は御身のために読経をして、これまでの悪業に打ち勝つ力を得られる事を祈りましょう』

こう云つてから回龍は主人に『お休みなさい』を云つた。主人は極めて小さな部屋へ案内した。そこには寢床がのべてあつた。それから一同眠りについたが、回龍だけは行燈のあかりのわきで読経を始めた。おそくまで読経勤行に余念はなかつた。それからこの小さな寢室の窓をあけて、床につく前に、最後に風景を眺めようとした。夜は美しかった。空には雲もなく、風もなかつた。強い月光は樹木のはつきりした黒影を投げて、庭の露の上に輝いていた。きりぎりすや鈴虫の鳴き声は、騒がしい音楽となつていた。近所の滝の音は夜のふけるに随つて深くなつた。回龍は水の

音を聴いていると、渴きを覚えた。それで家の裏の笥を想い出して、眠っている家人の邪魔をしないで、そこへ出て水を飲もうとした。襖をそつとあけた。そうして、行燈のあかりで、五人の横臥したからだを見たが、それにはいずれも頭がなかつた。

直ちに——何か犯罪を想像しながら——彼はびっくりして立った。しかし、つぎに彼はそこに血の流れていない事と、頭は斬られたようには見えない事に気がついた。それから彼は考えた。

『これは妖怪に魅ぼかされたか、あるいは自分ほろくろ首の家におびきよせられたのだ。……「搜神記」に、もし首のない胴だけのろくろ首を見つけて、その胴を別の処にうつしておけば、首は決して再びもとの胴へは帰らないと書いてある。それから更にその書

物に、首が帰つて来て、胴が移してある事をさとれば、その首は毬のようにはねかえりながら三度地を打つて、——非常に恐れて喘ぎながら、やがて死ぬと書いてある。ところで、もしこれがろくろ首なら、禍をなすものゆえ、——その書物の教え通りにしても差支はなからう』……

彼は主人の足をつかんで、窓まで引いて来て、からだを押し出した。それから裏口に来てみると戸が締っていた。それで彼は首は開いていた屋根の煙出しから出て行つた事を察した。静かに戸を開けて庭に出て、向うの森の方へできるだけ用心して進んだ。森の中で話し声が聞えた、それでよい隠れ場所を見つけるまで影から影へと忍びながら——声の方向へ行つた。そこで、一本の樹

の幹のうしろから首が——五つとも——飛び　　って、そして飛び

りながら談笑しているのを見た。首は地の上や樹の間で見つけた虫類を喰べていた。やがて主人の首が喰べる事を止めて云った、『ああ、今夜来たあの旅の僧、——全身よく肥えているじゃないか、あれを皆で喰べたら、さぞ満腹する事であろう。……あんな事を云って、つまらない事をした、——だからおれの魂のために、読経をさせる事になってしまった。経をよんでいるうちは近よる事がむつかしい。称名を唱えている間は手を下す事はできない。しかしもう今は朝に近いから、たぶん眠つたろう。……誰かうちへ行って、あれが何をしているか見届けて来てくれないか』

一つの首——若い女の首——が直ちに立ち上って蝙蝠のように

軽く、家の方へ飛んで行つた。数分の後、歸つて来て、大驚愕の調子で、しゃがれ声で叫んだ、

『あの旅僧はうちにいません、——行ってしまいました。それだけではありません。もつとひどい事には、主人の体を取って行きました。どこへ置いて行つたか分かりません』

この報告を聞いて、主人の首が恐ろしい様子になつた事は月の光で判然と分つた。眼は大きく開いた、髪は逆立つた、齒は軋きしつた。それから一つの叫びが唇から破裂した、忿怒の涙を流しながらどなつた、

『からだを動かされた以上、再びもと通りになる事はできない。死なねばならない。……皆これがあの僧の仕業だ。死ぬ前にあの

僧に飛びついてやろう、——引き裂いてやろう、——喰いつくしてやろう。……ああ、あすこに居る——あの樹のうしろ——あの樹のうしろに隠れている。あれ、——あの肥ふとた臆病者』……

同時に主人の首は他の四つの首を随えて、回龍に飛びかかった。しかし強い僧は手ごろの若木を引きぬいて武器とし、それを打ちふって首をなぐりつけ、恐ろしい力でなぎたててよせつけなかった。四つの首は逃げ去った。しかし、主人の首だけは、いかに乱打されても、必死となって僧に飛びついて、最後に衣の左の袖に喰いついた。しかし回龍の方でも素早くまげをつかんでその首を散々になぐった。どうしても袖からは離れなかったが、しかし長い呻きをあげて、それからがくことを止めた。死んだのであつ

た。しかしその齒はやはり袖に喰いついていた。そして回龍のありたけの力をもつてしても、その顎を開かせる事はできなかつた。彼はその袖に首をつけたままで、家へ戻つた。そこには、傷だらけ、血だらけの頭が胴に歸つて、四人のろくろ首が坐つてゐるのを見た。裏の戸口に僧を認めて一同は『僧が来た、僧が』と叫んで反対の戸口から森の方へ逃げ出した。

東の方が白んで来て夜は明けかかつた。回龍は化物の力も暗い時だけに限られている事を知つていた。袖についてゐる首を見た——顔は血と泡と泥とで汚れてゐた。そこで『化物の首とは——何と云うみやげだろう』と考へて大声に笑つた。それからわずかの所持品をまとめて、行脚をつづけるために、徐ろに山を下つた。

直ちに旅をつづけて、やがて信州諏訪へ来た。諏訪の大通りを、肘に首をぶら下げたまま、堂々と濶歩していた。女は氣絶し、子供は叫んで逃げ出した。余りに人だかりがして騒ぎになったので、捕吏とりてが来て、僧を捕えて牢へ連れて行った。その首は殺された人の首で、殺される時、相手の袖に喰いついたものと考えたからであつた。回龍の方では問われた時に微笑ばかりして何にも云わなかつた。それから一夜を牢屋ですごしてから、その土地の役人の前に引き出された。それから、どうして僧侶の身分として袖に人の首をつけているか、なぜ衆人の前で厚顔にも自分の罪惡の見せびらかしをあえてするか、説明するように命ぜられた。

回龍はこの問に対して長く大声で笑つた、それから云つた、

『皆様、愚僧が袖に首をつけたのではなく、首の方から来てそこへついたので——愚僧迷惑至極に存じております。それから愚僧は何の罪をも犯しません。これは人間の首でなく、化物の首でございませぬ、——それから化物が死んだのは、愚僧が自分の安全を計るために必要な用心をしただけのことからで、血を流して殺したのではございませぬ』……それから彼は更に、全部の冒険談を物語って、五つの首との会戦の話に及んだ時、また一つ大笑いをした。

しかし、役人達は笑わなかった。これは剛腹頑固な罪人で、この話は人を侮辱したものと考えた。それでそれ以上詮索しないで、一同は直ちに死刑の処分をする事にきめたが、一人の老人だけは

反対した。この老いた役人は審問の間には何も云わなかったが、同僚の意見を聞いてから、立ち上つて云つた、『まず首をよく調べましよう、これが未だすんでいないようだから。もしこの僧の云う事が本当なら、首を見れば分る。……首をここへ持つて来い』

回龍の背中からぬき取つた衣にかみついている首は、裁判官達の前に置かれた。老人はそれを幾度もして、注意深くそれを調べた。そして頸の項うなじにいくつかの妙な赤い記号らしいものを発見した。その点へ同僚の注意を促した。それから頸の一端がどこにも武器で斬られたらしい跡のない事を見せた。かえつて落葉が軸から自然に離れたように、その頸の断面は滑らかであつた。……そこで老人は云つた、

『僧の云った事は全く本当としか思われない。これはろくろ首だ。』
「南方異物志」に、本当のろくろ首の項うなじの上には、いつでも一種の赤い文字が見られると書いてある。そこに文字がある。それはあとで書いたのではない事が分る。その上甲斐の国の山中にはよほど昔から、こんな怪物が住んでおる事はよく知られておる。：：しかし』回龍の方へ向いて、老人は叫んだ——『あなたは何と強勇なお坊さんでしょう。たしかにあなたは坊さんには珍らしい勇気を示しました。あなたは坊さんよりは、武士の風がありますな。たぶんあなたの前身は武士でしょう』
『いかにもお察しの通り』と回龍は答えた。『剃髪の前は、久しく弓矢取る身分であつたが、その頃は人間も悪魔も恐れませんでした

した。当時は九州磯貝平太左衛門武連と名のつていましたが、その名を御記憶の方もあるいはございましょう』

その名前を名のられて、感嘆のささやきが、その法廷に満ちた。その名を覚えている人が多数居合せたからであつた。それからこれまで裁判官達は、たちまち友人となつて、兄弟のような親切をつくして感嘆を表わそうとした。恭しく国守の屋敷まで護衛して行つた。そこでさまざまの歓待饗応をうけ、褒賞を賜つた後、ようやく退出を許された。面目身に余つた回龍が諏訪を出た時は、このはかない娑婆世界でこの僧ほど、幸福な僧はないと思われた。首はやはり携えて行つた——みやげにすると戯れながら。

さて、首はその後どうなったか、その話だけ残っている。

諏訪を出て一兩日のあと、回龍は淋しい処で一人の盜賊に止められて、衣類を脱ぐ事を命ぜられた。回龍は直ちに衣ころもを脱して盜賊に渡した。盜賊はその時、始めて袖にかかっているものに気がついた。さすがの追剥ぎも驚いて、衣ころもを取り落して、飛び退いた。それから叫んだ、『やあ、こりやとんでもない坊さんだ。おれよりもっと悪党だね。おれも実際これまで人を殺した事はある、しかし袖に人の首をつけて歩いた事はない。……よし、お坊さん、こりやおれ達は同じ商売仲間だぜ、どうしてもおれは感心せずには居られない。ところで、その首はおれの役に立ちそうだ。おれはそれで人をおどかすんだね。売ってくれないか。おれのきもの

と、この衣ころもと取り替えよう、それから首の方は五両出す』

回龍は答えた、

『お前が是非と云うなら、首も衣も上げるが、実はこれは人間の首じゃない。化物の首だ。それで、これを買って、そのために困つても、わしのために欺かれたと思つてはいけない』

『面白い坊さんだね』追剥ぎが叫んだ。『人を殺してそれを冗談にしているのだから、……しかし、おれは全く本気なんだ。さあ、きものはここ、それからお金はここにある。——それから首を下さい。……何もふざけなくつてもよからう』

『さあ、受け取るがよい』回龍は云つた。『わしは少しもふざけていない。何かおかしい事でももしあれば、それはお前がお化け

の首を、大金で買うのが馬鹿げていてはおかしいと云う事だけさ』それから回龍は大笑をして去った。

こんなにして盗賊は首と、衣を手に入れてしばらく、お化の僧となつて追剥ぎをして歩るいた。しかし諏訪の近傍へ来て、彼は首の本当の話を聞いた。それからろくろ首の亡霊の祟りが恐ろしくなつて来た。そこでもとの場所へ、その首をかえして、体と一緒に葬ろうと決心した。彼は甲斐の山中の淋しい小屋へ行く道を見つけたが、そこには誰もいなかった。体も見つからなかった。そこで首だけを小屋のうしろの森に埋めた。それからこのろくろ首の亡霊のために施餓鬼を行った。そしてろくろ首の塚として知

られている塚は今日もお見られる。
（とにかく、日本の作者は
そう公言する）

青空文庫情報

底本：「小泉八雲全集第八巻 家庭版」第一書房

1937（昭和12）年1月15日発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

その際、以下の置き換えをおこないました。

「敢て↓あえて 或↓ある・あるい 居↓い・お 如何↓いか
何れ↓いずれ 置↓お 沢山↓たくさん 度々↓たびたび 多分
↓たぶん 甚だ↓はなはだ 程↓ほど 先ず↓まず 若し↓もし
余程↓よほど 故↓ゆえ 僅か↓わずか」

入力：京都大学電子テキスト研究会入力班（大石尺）

校正：京都大学電子テキスト研究会校正班（大久保ゆう）

2019年2月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<https://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ろくろ首

ROKURO-KUBI

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫
著者 小泉八雲
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>